特集 新しい評価のあり方

「新学習指導要領」のもとでの評価をめぐって

酒井英樹
（信州大学）

1. はじめに

本稿では，『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校　外国語）』（2011 年 6 月，以下「参考資料」と呼びます）で示されているポイントをできるだけ具体的に紹介します。なお，この資料は国立教育政策研究所のウェブサイトから入手できます。

2. 評価の観点

新学習指導要領においても，目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定を着実に実施することが示されました。観点別学習状況の評価とは，目標に照らしてその実現状況を観点ごとに評価し，「十分満足できる」状況と判断されるもの（A），「おおむね満足できる」状況と判断されるもの（B），「努力を要する」状況と判断されるもの（C），と判断することです。また，評定とは，これらの実現状況を総括的に評価して，5 段階で記述することです。

外国語科における評価の観点として，① コミュニケーションへの関心・意欲・態度，② 外国語表現の能力，③ 外国語理解の能力，④ 言語や文化についての知識・理解という 4 観点が示されています。「表現の能力」「理解の能力」という名称が，「思考・判断・表現」や「知識・理解」という表現の中の「表現」や「理解」との混同を避けるために，「外国語表現」「外国語理解」という言い方に変わっていますが，基本的には現在の観点と同じと考えてよいでしょう。

3. ポイント 1「評価の観点の考え方」

特に，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「言語や文化についての知識・理解」について，ポイントを述べます。

前者の趣旨は，「コミュニケーションに関心をもち，積極的に言語活動を行い，コミュニケーションを図ろうとする」です。コミュニケーションへの取り組みや継続の様子を評価することになります。評価規準を考えるポイントは，観察可能な表現にすることです。例えば，「積極的に読もうとしている」という表現ではなく，「必要に応じて辞書を活用しながら読もうとしている」というように，生徒の姿を具体的に考えることが重要です。

後者の趣旨は，「外国語の学習を通して，言語やその運用についての知識を身に付けているとともに，その背景にある文化などを理解している」です。特に，文化については，「一般常識的な知識や百科事典のような内容ではなく，技能の運用で求められる，言語の背景にある文化に限って評価する。すなわち，理解をしていないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景を評価の対象とする。」（参考資料，p. 34）と述べられています。下線を引いた部分が重要です。この指摘は，『学習指導要領解説』（2008）において，「これら（筆者注：言語や文化についての知識・理解）はコミュニケーションを図る上で重要な働きをするものである。」（p. 6）と説明されていることを受けています。参考資料の事例では電子メールのフォーマットが取り上げられていますが，他にも日付の書き方（日月の順番か，月日の順番か）や名前の言い方（姓と名の順番）についての知識が評価対象となりうると考えています。例えば，楊美玲が，“Hello. My name is Yang Meiling.”と自己紹介したときに，名前の言い方についての文化的な知識がないと，“Nice to meet you, Ms Meiling.”と誤った言い方をしてしまう

可能性があります。

一方，すべてのレッスンについて，文化についての知識に関する評価規準を設定する必要はありません。というよりも，コミュニケーションに支障をきたすような文化情報というのはそれほど多くはありません。*24NC* の各レッスンで，「この課で学ぶこと」として，題材に関する項目が挙げられています。例えば，3年生のLESSON 3 *Rakugo* Goes Overseasでは，「日本の伝統文化およびそれを世界に発信することに関心を高める」(p. 23) と書かれています。これは生徒が学ぶ際の指針として用いるためのものです。観点別学習状況の評価規準として用いることができるかについては検討が必要です。

4. ポイント2「学年ごとの目標設定」

外国語においては，3年間で達成すべき目標が掲げられています。そこで，学習指導要領では，指導計画の作成上の配慮事項のひとつとして，各学校において学年ごとの目標設定をするように求められています。その上で，それぞれの単元の位置づけを考えます（参考資料，p. 7)。概略，以下の流れで目標及び評価規準を設定するようになります。

ステップ1: 3年間で達成すべき目標を確認する。
ステップ2: 各学年で達成すべき目標を設定する。
ステップ3: 各学年の目標を達成するための各単元の目標を設定する。
ステップ4: 各単元の目標に準拠する評価規準を設定する。

5. ポイント3 「4技能統合の評価の観点」

評価の観点では，外国語表現の能力と外国語理解の能力が分かれています。一方，技能統合は，読んで書いたり，聞いて話したりするなど，外国語表現の能力と外国語理解の能力にまたがることがあります。このような場合の評価は，指導の中心となる観点で行うということになります。

例えば，「インタビュー中のメモにもとづいて英語で記事を書く」ことの指導の場合，聞くことと書くことの技能が関わっています。記事を書くことが中心となる場合には，「外国語表現の能力」の点から評価をすることになります。

参考資料の中で「まとまりのある文章を読んで，自分の感想を書くことができる」という評価規準が紹介されています。読むことと書くことの技能の統合の指導を行うのですが，評価の対象は「読むこと」ではなく「書くこと」としています。「読んだ内容に基づいて感想を書いているかどうか，本文中の語句や表現を抜き出し，理由とともに自分の感想を書くことができるかどうかをチェックする」(p. 43) と書かれています。この例を見ると，読んだことを踏まえて書かれているかどうかも加味することで，技能統合の評価を行うとしていることがわかります。インタビュー記事を書く場合には，「メモした語句や表現を取り入れながら記事を書くことができる」というように，聞いたことを踏まえて書いているかどうかを加味することになります。

6. ポイント4 「指導してから評価すること」

評価とは，目標に照らし合わせて指導したことが学習されているかどうかを見るものです。つまり，十分に指導し，練習する機会を与えてから評価することが重要です。したがって，単元の最初は指導に徹し，評価しない授業があってもよい（というより，むしろ当然である）ということになります。

先生方の多くは，評価のない授業という考え方に違和感を持つかもしれません。その違和感は，形成的評価と総括的評価を混同しているからであると思われます。参考資料では，形成的評価を，「授業改善のための評価」(p. 11)，「指導に生かすための評価」(p. 31) と呼んでいます。また，総括的評価は，「指導後の生徒の状況を記録するための評価」(p. 11) や「観点別評価や評定につながる評価」(p. 31) と表現しています。本時の主眼が達成されたかどうかという評価は，形成的評価に関する授業評価であると考えられます。生徒一人一人の学習状況を把握するための評価とは区別する必要があります。

また，指導もしていないのに評価規準が設定されていることがあります。特に，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に関する評価規準は何も指導していないのに用いられる場合が見られます。「指導してから評価」というポイントを踏まえると，

「必要に応じて辞書を活用しながら読む」姿を評価しようと考えたら，単元の中で辞書活用について指導し，辞書使用を促す時間を設けたあとで，必要に応じて辞書を活用しながら活動に取り組んでいるかを評価する必要があります。

また，目標及び評価規準を絞り込むことも重要です。1つの単元で指導できる事項の数は限られています。参考資料には，「ある単元（題材）において，あまりにも多くの評価規準を設定したり，多くの評価方法を組み合わせたりすることは，評価を行うこと自体が大きな負担となり，その結果を後の学習指導の改善に生かすことも十分できなくなるおそれがある。」(p. 14) と書かれています。計画的に指導を行い，評価していくことが重要です。

7. ポイント5 「複数レッスンにまたがる評価規準」

複数のレッスンにまたがって評価規準を設定することもあります。参考資料では，形容詞の比較表現を扱ったレッスンと副詞の比較表現を扱ったレッスンを合わせて，「比較表現を用いて表現できる」という評価規準を設定する例が紹介されています。

このポイントに関する例を示します。*24NC* の1年生において，「英語で自己紹介をする」という活動は，LESSON 1（I am ～）から LESSON 3（一般動詞）まで指導してから評価をしたほうがよいと思われます。同様に，1年生の LESSON 4，5（WH疑問文）と LESSON 6（一般動詞の3人称・単数・現在形）をまとめて扱い，インタビューで得た情報をもとに，第三者を英語で紹介できるという評価規準を設定することができます。

8. 目標及び評価規準設定のプロセス

24NC の3年生の LESSON 3を取り上げて，目標及び評価規準設定のプロセスを示します。このレッスンではインタビュー活動が扱われています。オーストラリアの中学生ショーンが英語落語を公演しているきみ江さんにインタビューをします。その新聞記事が USE Read の読み物となっています。

このテキストの第1の特徴は，インタビュー特有の表現が出てきていることです。例えば，インタビュー開始の表現として，“Kimie-san, thank you for this interview.”や，終了時の表現 “Thank you for your time. I’ve enjoyed talking with you.” が使われています。第2の特徴は，相手に情報を求めるために疑問文（“I understand *rakugo* is a traditional performing art in Japan. Could you tell me more?”（現在のこと），“Why did you begin to perform *rakugo* in English?”（過去の経緯），“How long have you been on this tour?”（最近の日程），“What’s next for you?”（今後の抱負）など）が使われていることです。これらの疑問文をよく見てみると，さまざまな時制（現在・過去・現在完了の表現）が使われていたり，さまざまな種類の WH 疑問文（why, how long, what）が用いられていることがわかります。また，相手の回答に “I see.” とうなずいたり，“That’s true. I have never heard a Japanese joke.” や “I’m impressed.” と感想を述べたりしているという特徴もあります。これらの特徴を考慮すると，インタビューを適切に行うことを指導するのに適したレッスンであると考えられます。

インタビューを行うにはどのような力が必要でしょうか。例えば，(a) インタビューで行いたい質問を決めて英語で表現する，(b) 適切にインタビューを開始し終了する，(c) 相手の回答にあいづちをうったり感想を述べたりする，(d) インタビュー中にメモをとる，(e) メモをもとにして紹介記事を書く，などの能力が必要であると考えられます。

これらの能力をすべて3年生の LESSON 3で指導しなくてはならないのでしょうか。いくつかの要素は，もっと早い時期に指導が可能です。例えば，1年生の LESSON 6 My Family in the UK の USE Mini-project では「友達の紹介をしよう」という活動が示されています。友達にインタビューをして紹介文を書く活動です。ステップ2（Speak）では，表が与えられて，①名前，②好きなもの，③クラブ活動，④持ち物・ペット，⑤その他，と尋ねる内容は決められています。また，ステップ4（Write）では，紹介文を書く際に，モデル文を参考できるようになっています。つまり，1年生では，決められた項目について質問を英語で行うことができ，さら

にモデル文を参考にして得られた情報を書くことを指導できます（インタビューの要素のaとe）。

2年生のLESSON 7 Good PresentationのUSE Speakでは，「人気があるものは何？」というテーマで，クラスで人気のあるものを調べて，結果を発表する活動があります。ここでは，トピック（sport, animal, color, song, food, country）を選択できるようになっていますが，尋ねる内容は，①何が一番好きか，②その理由は何か，と決められています。インタビューした結果を，英語にまとめるだけでなく，グラフや表を活用しながら発表することが求められています。2年生では，インタビューして得られた内容を英語で表現したり，発表したりすることを指導することができます（インタビューの要素のe）。

3年生のLESSON 2 Finland―Living with ForestsのUSE Listen「インタビューを聞こう」では，「ラジオ番組に，フィンランド出身の映画スター，アン・マキネン（Anne Makinen）が登場します。インタビューを聞いてみよう。」という活動が示されています。ステップ1では，インタビュアーの作ったメモを見ながら，実際にたずねた質問をチェックするように求められています。また，「あなたがアンにインタビューするとしたら，どんな質問をしたいですか。質問を考え，ペアになってたずね合おう」という指示もあり，質問を考えるように求めています。LESSON 2では，インタビューで聞いてみたい質問を決め，英語で表現することを指導することができます（インタビューの要素のa）。

聞いたことをメモするということは，比較的早くから継続的に行われています。例えば，1年生のLESSON 7 Part 1のPracticeでは，ステップ2のSpeakとして，「ペアになって，あなたの得意なことを話してみよう。なるべく多くの相手と話し，聞いたことをメモしよう。」と指示されています。そして，3年生まで，聞いたこと・話したことについてメモをする活動が継続して行われています（インタビューの要素のd）。

相手の発話に応じたり，感想を述べたりする表現は，次の例の下線部のように1年生のLESSON 1から扱われています（インタビューの要素のc）。

Part 2: Emma: I'm from Australila.
Ken: Oh, you are from Australia.
Part 3: Ken: I'm hot.
Meiling: Really? Are you thirsty?

これ以降，どのレッスンにも，相手の発話に応じたり，感想を述べたりする表現が扱われています。

これらのことを踏まえて各学年の目標を設定します（ポイント2。学年ごとに目標を設定する）。

〈学年ごとの目標設定の例〉

[1年次]

- 決められた項目について質問を英語で表現できる。
- 相手の発話に応じたり，感想を述べたりすることができる。（ポイント5。複数のレッスンにまたがって指導する。）

[2年次]

- 聞いたり話しながら，その内容をメモすることができる。（ポイント5。1年次から指導を始めるが，2年次に評価を行う。）
- インタビューした結果を英語で書いたり，発表したりすることができる。

[3年次]

- インタビューで質問したい項目を自分で考えて英語で表現できる（LESSON 2）。
- インタビューを適切に行うことができる（LESSON 3）。

学習指導要領では，言語活動の1つとして，「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること」（話すことのエ）が挙げられています。この内容に関わって，3年生のLESSON 3では，「いろいろな工夫をして適切にインタビューをする」ことを目標に設定することができます。この目標に応じて「外国語表現の能力」に関する評価規準を設定することができます。この単元では，インタビュー特有の表現を使いながら，適切にインタビューを開始し，終了することを中心に指導し，練習する機会を与え，評価することになります（ポイント4。指導したことを評価する）。